



インドネシア人日本語学習者におけるメタ言語意識を利用した連
体修飾節の習得研究

**Study on Acquisition of Japanese Adnominal Clauses
Using Metalanguage Awareness in Indonesian Learners**

Samsul Maarif

*Studies in Japanese Language and Culture, Graduate School of Language and Culture
Osaka University, Osaka, Japan
samsulmaarifhasjim@gmail.com*

ABSTRACT

The theoretical research of Japanese linguistics is diverse. However, applying such research theory to Japanese language education does not necessarily help learners' understanding. The purpose of this research is to concretely present the problems that arise from the gap between theory and practice in Japanese language research and Japanese language education. In this study, we examine the effect of the theoretical explanation of the Japanese adnominal clause on the learners' understanding. We selected 10 second-year university Japanese learners as research subjects. They were selected because second-year learners already learn the adnominal clause. The adnominal clause was chosen because it has a considerably simple construction to check whether the learners can comprehend the meaning from those simple constructions. Since the theoretical explanation of linguistics is difficult for learners to understand, we gave a lesson using the learners' awareness of language called "metalanguage awareness." By using metalanguage awareness, learners are guided to understand the meaning through the comprehension of its grammatical construction using linguistic terms both in Japanese and their native language, which is Indonesian. As a result, it was found that even though adnominal clause construction is simple, the understanding of the meaning is not that simple. The understanding of adnominal clauses depends on the understanding of more basic learning items of "particles" and "clauses", which learners still can't grasp. We conclude that introducing such dependency in focus on form teaching method has the advantage for the teacher to check the degree of learners' understanding. In this study, the adnominal clause can be used to check whether learners have fully understood the concept and usage of "particles" and "clauses" in Japanese. Since both concepts are very basic, it is important to take a step back and re-explain both concepts and usage so learners can use them correctly in the future.

KEYWORDS

Applied Cognitive Linguistics; Japanese Adnominal Clause; Metalanguage awareness

ARTICLE INFO

First received: 12 July 2021

Final proof accepted: 10 October 2021

Available online: 19 December 2021

はじめに

日本語に関する言語学の理論的研究テーマは多岐にわたる。しかし、そのような研究の理論を日本語教育に応用することが、必ずしも学習者の理解を助けることにはならない。本研究の目的は日本語研究と日本語教育における理論と実践の乖離から生じる問題を具体的に提示することである。Achard (2008) では最も一般的な問題は言語学研究の成果を言語教育に応用させないという批判がある。一方、言語教育からすると、言語学研究の成果は必ずしも学習者に役に立つとは限らず、場合によっては混乱させてしまうこともあると述べている。

本研究は認知言語学を日本語教育場面に応用させ、言語教育と言語学研究の間に懸け橋となる立場にある。

Serrano (2011) ではメタ言語支持が第二言語取得の分野に議論され、メタ言語的支持による学習者の知識とパフォーマンスへの影響について研究を行った。その結果、英語所有詞の教授において、メタ言語的支持はメタ言語的な知識と口頭産出にいい効果があったということが分かった。

本研究の実験では連体修飾節の「内の関係」と「外の関係」という言語学の理論的説明を授業で行うことが学習者の理解にどのような効果をもたらすかについて検討する。言語学の理論的な説明は学習者にとって理解しづらいため、「メタ言語意識」という学習者の言語への意識を利用する授業を行った。「メタ言語意識」を利用することで学習者の連体修飾節の理解への手助けになるかどうかを授業前後に学習者を対象に実施する試験の結果に基づいて検討した。

連体修飾節に関する項目は初級の段階で導入される。例として「カレーライスを食べたい」「お母さんが作りました」のような二つの文から「お母さんが作ったカレーライスを食べたい」という文を作る練習が挙げられる（『学ぼう！にほんご初級 1』）。その後の課では連体修飾節に関する項目はほぼ触れられていない。

連体修飾節は一見シンプルな文法項目だが、実際は主名詞と修飾節との関係を適切に理解しなければ意味を取り違えてしまう可能性がある項目である。例えば、日本語能力試験の読解などで間違った解釈をしてしまうと不正解の選択肢を選びかねない。このように、日本語の連体

修飾節はシンプルだが重要な項目でもあるため本実験の対象として選ばれた。

本実験はインドネシアの大学の日本語学科の2年生 10 人を対象とし、「メタ言語」を意識させるグループとそうでないグループに分けた。

「メタ言語」を意識させるグループの方がより良い成績をあげると予測した。しかし、実験の結果、「メタ言語」を意識させたグループは連体修飾節のテストでは好成績を残したものの、助詞の役割や節の概念などの連体修飾節に関わる文法項目の理解が十分でないことが分かった。

先行研究

関係節化の可能性の階層 (Noun Phrase Accessibility Hierarchy)

関係節化の可能性の階層 (Noun Phrase Accessibility Hierarchy: 以下 NPAH) とは Keenan & Comrie (1977) が提唱した関係節化のしやすさの序列である。50 以上の言語の類型学的調査を行った結果、以下の関係節化のしやすさの序列が分かった。

主語 (SU) > 直接目的語 (DO) > 間接目的語 (IO) > 前置詞の目的語 (OP) > 所有格 (GEN) > 比較級の目的語 (OCOMP)

ここでは「>」マークは「より可能性が高い」という意味を表している。つまり、「主語」は「直接目的語」よりも関係節化する可能性が高いということである。よって、この序列では左に行けば行くほどより関係節化しやすいということである。この NPAH は階層 (Hierarchy) を表しているのだから、ある言語が「間接目的語」を関係節化できる場合、その左の「直接目的語」と「主語」も関係節化することができるということである。また、この序列は関係節化のしやすさを表すので、左に行けば行くほど出現頻度も高くなる。

NPAH はもともと類型論的研究であるが、言語習得に関しては触れていない。しかし、その類型論的背景があるからこそ第二言語習得への応用、さらには、学習者の言語学習を容易にする方策につながる可能性が期待される。

齋藤 (2002) では、第二言語習得と NPAH の関連性についてのさまざまな研究がまとめられている。その研究では、主に以下の 2 点について述べられている。まず第二言語習得の過程が

NPAH の序列通りになっているのか、そして、NPAH の序列内のある項目を習得することが、その下位項目を習得することにつながるのか、ということである。これらのさまざまな研究は、第二言語習得においてもほとんど NPAH の序列通りに習得が進むという結果を表している。

内の関係と外の関係

日本語の連体修飾（名詞修飾）には、主名詞と修飾節との関係を英語の「*who, whom, whose*」、インドネシア語の「*yang*」などのような関係代名詞で表さない。

- (1) さんまを焼く男
- (2) さんまを焼く匂い

例 (1) では主名詞「男」と修飾節「さんまを焼く」の関係は「男がさんまを焼く」というガ格で成立する。つまり、「男」は「さんまを焼く」の主語である。一方、例 (2) では、主名詞「匂い」と修飾節「さんまを焼く」との関係は「*匂い {が・を・で・に} さんまを焼く」のように格助詞で成立しない。寺村 (1975) は、日本語の連体修飾の主名詞と修飾節の関係が例 (1) のように、格助詞で成立するものを「内の関係」と呼び、例 (2) のように格助詞で成立しないものを「外の関係」と呼んでいる。

寺村 (1975) では「外の関係」を「内容補充的修飾」とも呼び、さらに、例 (3) の「ふつう内容補充」と例 (4) の「相対的補充」に分けている。

- (3) 選挙に出る考え
(発話・思考の内容)
- (4) たばこを買ったおつり
(たばこを買った代金のおつり)

このような「外の関係」はほかの言語では関係節で表されにくく、日本語特有の表現である。そのため「外の関係」の習得は学習者にとって困難である (寺村 1980)。

メタ言語知識

Azarola (2013) は、社会的な交流による知識の発達について述べている Vygotsky と同じ立場であり、「メタ言語知識」はコミュニケーション活動の目的を概念化する道具として第二言語の発達に関連すると述べている。そのため、

「メタ言語知識」を利用するにあたっては以下の三つのポイントが重要であると述べている。

- 文法の指導目標は概念化する能力の育成でもある。
- 文法の指導において意味・語用論的な要素を一貫した方法で提示するのが重要である。
- 「メタ言語知識」は言語的思考をするための道具として文法の説明と文型の練習に利用するだけではなく、概念化が必要なコミュニケーションやタスクをするときにも利用すべきである。

Azarola (2013) は学習者に正しく提示し、操作すれば、「メタ言語知識」が第二言語学習者の思考活動の一部となると述べている。そして、その思考活動とコミュニケーション行為を統合したタスクに「メタ言語知識」を応用する実験を行った。その実験では学習者にコミュニケーション行為を意識させ、なぜそこにその文法項目を選んだのか学習者自身に説明させるのが狙いだった。

実験を行う前に学習者はスペイン語のアスペクトについて事前に教えられた。実験はコミュニケーションと概念化するタスクの形式で行われた。コミュニケーション・タスクでは *Thanksgiving* の休暇中の出来事について、教師にアドリブで話させ、それを録音した。教師は、話すとき必ずスペイン語のアスペクトを利用するように指示されていた。そして、学生にその音声を文字化させた。概念化するタスクでは文字化した話から 8 つの発話を分析させた。その分析では話の流れにおいて語彙、文法的な要素がどのように関連するのか。また、自分が伝えたいことが使用されるアスペクトで適切に表せるのかを説明しなければならない。実験の結果、スペイン語のアスペクトを正しく使える学習者が、概念化された難しい文法項目を自分自身に説明することで文法の理解度や正用率が高まったということが分かった。

結論として、Azarola (2013) では「メタ言語知識」を有効な言語思考として利用するには、文法をより概念的な項目として指導するべきであると述べている。そのため教師には、単純な文法のルールの説明だけにとどまらず、より良い語彙、語用論的な文法の説明が求められる。重要なのは、コミュニケーションの場における学習者の言葉選びに、しっかりとした概念的な理解が伴っているということである。

Serrano (2011) では英語を第二言語とする小学生を対象として、英語の所有限定詞の授業でメタ言語的な支持を利用し、メタ言語知識と口頭産出との影響を検証した。その結果として、メタ言語的な支持には向き不向きな学生があったが、メタ言語的な支持はメタ言語的な知識と口頭産出にいい効果があった。しかし、学生の知識とパフォーマンスに重要な影響を与えるとは言いえないと述べている。

本研究は Serrano (2011) の対象者と違って、小学生ではなく、大学生であるため、知識とパフォーマンスとの影響が期待できると考えた。

また、森内 (2016) では外国語教育において、学習者のメタ言語能力を育成するためには書く活動が重要だと述べている。しかし、その書く活動で学生の誤りを訂正するという一般的な方法では、学生が言語形式に注意しない傾向がある。そのため、誤りの訂正ではなく、メタ言語的なフィードバックという方法で学生の注意を意味から言語形式に移行させる必要がある。しかし、その方法には教師が学生の誤りを上手く活用し、*Focus on Form* に気づかせる努力が必要と述べている。

本研究では連体修飾節の内と外の関係において、主名詞を修飾節に戻す練習を通して、学習者に *Focus on Form* に気づかせることを試みた。

調査方法

実験の対象

本研究ではパジャジャラン大学のインドネシア人日本語学習者 10 名の 2 年生を対象として、2021 年 4 月 10、16、17 日に実験を行った。実験はメタ言語を意識させることによって連体修飾節の理解を促進するという目的で行われたため、対照群と実験群それぞれ 5 名のグループを形成した。対照群と実験群を選ぶ方法に関しては実験前のテストの結果を利用した。以下表 1 が対象とする学生のデータである。

表 1. 被験者のデータ

対照群			実験群		
学生	学習歴 (年)	能力試験	学生	学習歴 (年)	能力試験
K	2	N5	Z	3	N5 不合格
AD	>3	N5	R	2	ない
B	>3	N5	F	2	ない
M	>3	N5	AR	2	ない
AB	>3	N2	D	2	ない

実験の流れ

以下実験の流れを述べる：

- 2021 年 3 月 16 日～4 月 5 日まで被験者を募集した。
- 2021 年 4 月 10 日、実験前のテストを行った。
- 2021 年 4 月 16 日、対照群の授業を行い、テストを課して翌日に提出させた。
- 2021 年 4 月 17 日、実験群の授業を行い、テストを課して翌日に提出させた。

連体修飾節は 1 年生ですでに習った項目であるため、実験授業前半では主に連体修飾節について復習させた。後半では内の関係と外の関係について教えた。実験は対照群と実験群に分け、対照群ではそのままの内容、つまり、日本語の連体修飾節のみについて教えた。一方、実験群ではメタ言語を意識させるためにインドネシア語の関係代名詞 *yang* の役割と有無についても気付かせるような内容とした。

実験前後に被験者に連体修飾を中心とするテストを受けさせた。テストは 3 つの問題形式から構成された。以下がそのテスト形式である：

- 問 1 では内の関係を表す文に○、外の関係を表す文に×を付ける形式で内の関係と外の関係を区別させる問題である。表 2 では、網掛けのものが内の関係である。
- 問 2 では問 1○を付けたものに主名詞を修飾節に戻す文に書き換える問題である。
- 問 3 では連体修飾を含む日本語の文をインドネシア語に訳させる問題である。

表 2. 問 1 の問題

実験前テスト		実験後テスト	
1	姉は高校で日本語を教える仕事をしています。	1	海外で人気なアニメを作った監督が亡くなりました。
2	店員が怒りを感じるお客さんの言葉について調べてみた。	2	差別に聞こえる政治家のスピーチが問題になった。
3	この小説では、友達にだまされる辛さがうまく書かれている。	3	自転車を置いた所を忘れてしまいました。
4	パンを買ったおつりでジュースを買った。	4	日本語を正しく発音する練習をしましょう。
5	たくさんの小説を書いた作家がテレビに出ている。	5	学校で花子さんがお化けを見た噂が広がっている。
6	水をまいた場所はどこですか。	6	その女性は津波で子供が亡くなった悲しみを話しました。
7	田中さんから聞いた話はいつも面白かった。	7	インターネットで広まる噂には嘘が多いです。
8	このアニメはロボットが人間の女の子を好きになる話です。	8	この洗剤はコーヒーを拭いた汚れもきれいにします。
9	日本ではお風呂に入る前に体を洗う習慣がある。	9	空を飛んでいる鳥を捕まえた。
10	高速道路を走っているバイクが警察に止められた。	10	日本ではお正月に田舎に帰る文化がある。

表 3. 問 1 の正答

実験前テスト		実験後テスト	
2	お客さんの言葉に店員さんが怒りを感じる。	1	(その) 監督が海外で人気なアニメを作った。
5	その作家がたくさんの小説を書いた。	2	政治家のスピーチが差別に聞こえる。
7	田中さんから(その)話を聞いた。	7	(その) 噂がインターネットで広まる。
10	バイクが高速道路を走っている。	9	鳥が空を飛んでいる。

以下が授業で行ったことである：

- まず、連体修飾節について振り返る内容を説明する。
- 実験群のみ：連体修飾と対応とするインドネシア語の関係代名詞 *yang* について導入して教える。「*yang*」の有無によって「*yang*」の役割を気づかせる。(メタ言語を意識させる)
- 「どんな本ですか?」「図書館で借りた」→「図書館で借りた本」というパターンで連体修飾を練習する。
- 連体修飾節内には「は」→「が」になる、主名詞に係るものは辞書形であるというルールを説明する。
- 「内の関係」と「外の関係」を説明する。「内の関係」の場合では主名詞が修飾節の格助詞を使って関係を表すことができる。

- 実験群のみ：「内の関係」のほとんどは関係代名詞「*yang*」で表せることを説明する。
- 「内の関係」と「外の関係」を区別するox問題で練習する。
- 「内の関係」の主名詞を修飾節に戻す練習をする。

調査結果と分析

本研究は問 1 と問 2 の結果を中心に分析を行う。まず、対照群と実験群の実験前後のテスト結果を見ていく。

授業前後テスト問 1 と 2 の結果

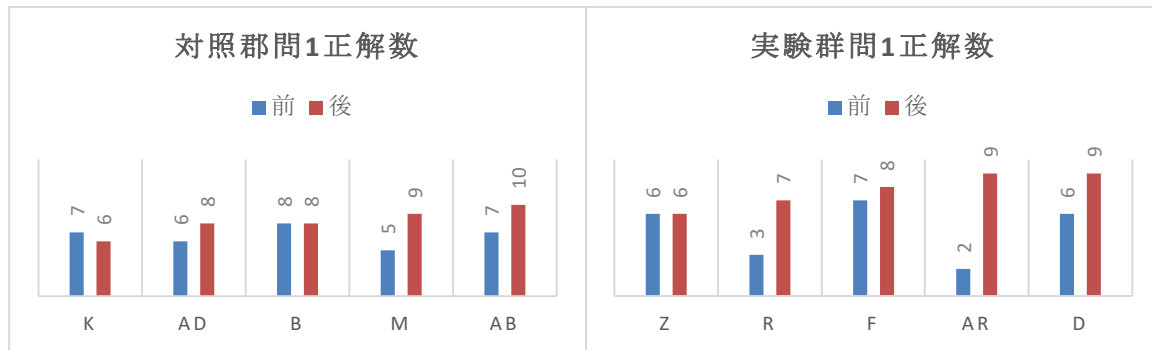


図 1. 対照群と実験群における前後テストでの問 1 の正解数

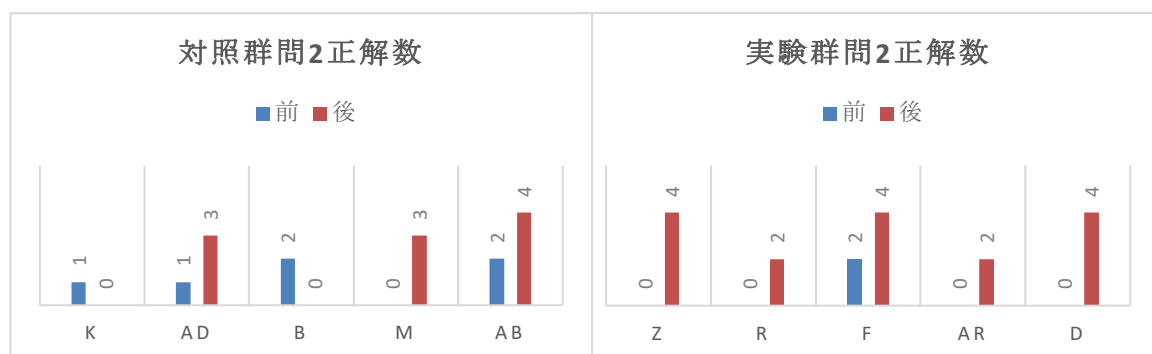


図 2. 対照群と実験群における前後テストでの問 2 の正解数

以上の図 1 と図 2 では対照群と実験群の問 1 と問 2 での正解数を表している。全体的には両方とも実験後のテストではよくなったが、対照群の対象群の平均正解数が 1.8 問に増えたのに比べ、実験群は 3 問に増えた。特に AR さんが最も伸びたことが分かった。また、実験群の問 2 の正解数も対照群を上回っている。正解数の結果を単純にみると「メタ言語意識」を通して言語学の理論的な観点が理解の手助けになるといえる。しかし、それぞれの学習者がどの問題で間違っているのか、また授業後のテストでどう変わったかという観点で見るとその結論を留保せざるを得ない。

以下の表 3 と表 4 で赤色の網掛は問 1 の誤答分布を表している。対照群 AB さんの授業後テストが満点になったのは、すでに能力試験 N2 に合格しているという理由がある。一方、他の学習者は

表 4 (授業後テスト) の誤答分布を表 3 (授業前テスト) と比べると、誤答分布はばらついている。

実験群の AR さんと D さんが表 4 (授業後テスト) で間違っているところは、表 3 (授業前テスト) でも同じタイプの問題である。Z さん、R さん、と F さんは表 4 (授業後テスト) と表 3 (授業前テスト) で間違っているところに大きなばらつきがあり、対照群の AD さんと B さんにも同じ様子がみられる。そして、表 4 (授業後テスト) のほとんどの誤答は「外の関係」だということの判断ミスであることが分かった。つまり、外の関係では主名詞と修飾節の関係は格助詞で表せないはずだが、学習者は表せると思ってしまったのである。その原因は格助詞の役割や使い方をまだ十分に理解していないからだと考えられる。

表 3. 授業前テスト問 1 の誤答分布

授業前	番号	問題	正解	タイプ	対照群					実験群					誤答数
					K	AD	B	M	AB	Z	R	F	AR	D	
問題1	1	姉は高校で日本語を教える仕事をしています。	×	内容	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○	8
	2	店員が怒りを感じるお客さんの言葉について調べてみた。	○	に格	○	×	○	×	○	×	×	○	×	○	5
	3	この小説では、友達にだまされる辛さがうまく書かれている。	×	付随 (結果)	×	○	×	×	×	×	×	×	○	×	2
	4	パンを買ったおつりでジュースを買った。	×	付随 (結果)	×	×	○	○	○	×	○	×	○	×	5
	5	たくさんの小説を書いた作家がテレビに出ている。	○	が格	○	○	○	×	○	○	○	○	×	×	3
	6	水をまいた場所はどこですか。	×	相対	○	×	×	×	×	×	○	×	○	○	4
	7	田中さんから聞いた話はいつも面白かった。	○	を格	○	○	○	○	○	×	×	○	×	○	3
	8	このアニメはロボットが人間の女の子を好きになる話です。	×	内容	○	○	×	×	○	×	×	○	○	○	6
	9	日本ではお風呂に入る前に体を洗う習慣がある。	×	内容	×	×	×	×	○	×	○	○	×	×	3
	10	高速道路を走っているバイクが警察に止められた。	○	が格	○	○	○	×	○	×	×	×	○	○	4
誤答数					3	4	2	5	3	4	7	3	8	4	

表 4. 授業後テスト問 1 の誤答分布

授業後	番号	問題	正解	タイプ	対照群					実験群					誤答数
					K	AD	B	M	AB	Z	R	F	AR	D	
問題1	4	日本語を正しく発音する練習をしましょう。	×	内容	○	×	×	×	×	○	×	○	×	×	3
	2	差別に聞こえる政治家のスピーチが問題になった。	○	が格	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	1
	6	その女性は津波で子供が亡くなった悲しみを話しました。	×	付随 (結果)	×	×	○	×	×	○	○	×	×	×	3
	8	この洗剤はコーヒーを拭いた汚れもきれいにします。	×	付随 (結果)	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	1
	1	海外で人気なアニメを作った監督が亡くなりました。	○	が格	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
	3	自転車を置いた所を忘れてしまいました。	×	相対	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	2
	7	インターネットで広まる噂には嘘が多いです。	○	が格	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
	5	学校で花子さんがお化けを見た噂が広まっている。	×	内容	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	7
	10	日本ではお正月に田舎に帰る文化がある。	×	内容	○	×	○	×	×	×	○	×	×	×	3
	9	空を飛んでいる鳥を捕まえた。	○	が格	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0
誤答数					4	2	2	1	0	4	3	2	1	1	

問 2 の誤答回答の分析

授業前後テストの問 1 と問 2 の正答数からみると実験群が良い結果を示している。しかし、それぞれの群が授業後に本当に理解しているのかを見るためにはどのような誤答をしているのかを分析しないと行けない。それぞれの群において最も目立った誤答を見ていこう。

表 5 は、ZさんとFさんの実際の答えを示したものである。これは、学習者が「内の関係」と思い込み、主名詞を修飾節に戻そうとしたものである。これはそもそも「外の関係」だから、主名詞を修飾名詞に戻せない。それにもかかわらず、学習者が無理やり格助詞を入れようとし、結果的に非文の回答になった。

さらに、表 6 では実験群のKさんとBさんは問 1 が正しく「内の関係」として判断できたにもかかわらず、主名詞を修飾節に書き換えるときに格助詞の誤用がみられた。

KさんとBさんの回答を見ると、格助詞の誤用のほかに、どれが修飾節なのかが分からないという問題もあるようである。つまり、二人とも「節」の概念がよく理解していないと考えられる。今までの連体修飾節の習得方法は「節」の概念を取り入れないで二つの文を一つにするという練習で行われた。この方法は文法を考えず、学生に負担をかけないという点ではいいかもしれないが、「節」の概念が十分に定着しないという欠点があると考えられる。「節」の概念を把握することで、文全体の意味をチャンクとして理解しやすくなり、誤解を防ぐ役割があると考えられる。つまり「節」という言語学的

な要素を意識させることが重要になってくる。
本研究では実験群において「節」の概念の説明

も取り入れたが、それが十分ではなかったと考えられる。

表 5. Z と F の授業後テスト問 2 の誤答回答

Z	F
練習で日本語を正しく発音する	練習を日本語を正しく発音する
噂に花子さんがお化けを見た	噂に花子さんがお化けを見た

表 6. K と B の授業後テスト問 2 の誤答回答

K	B
海外で監督に人気なアニメを作ったが忙しいです。	海外で人気なアニメを監督が作った。
差別にスピーチで聞こえる政治家が問題になった。	差別に聞こえるスピーチの政治家が問題になった。
インターネットで嘘の広まる噂が多いです。	インターネットの噂に広まる。
空を鳥の飛んでいるを捕まえた。	鳥が空を飛んでいるを捕まえた

学習者の連体修飾習得に対するメタ言語意識の効果

授業後のテスト問 1 においてガ格で主名詞を戻せる連体修飾節の正答率は上がった。しかし、実際に問 2 でそれを文として戻すタスクにおいては正答率が低くなり、問 1 とは逆の結果が生じた。ではなぜ問 1 での正答率が高いにもかかわらず、問 2 ではガ格を利用する文をうまく答えられなかったのだろうか。これにはおそらく Keenan & Comrie (1977) が主張した NPAH (Noun Phrase Accessibility Hierarchy) の通り、主語を表す関係代名詞が最も処理しやすく、そのため、学習者が意味を中心に理解することができる問 1 のような問題においては正答率が高くなるという理由があると考えられる。しかし、問 2 は意味よりも形式が中心になる問題であるため、問 1 で正解ができて問 2 ではうまくできなかったのではないだろうか。

確かに連体修飾節を「内の関係」と「外の関係」を区別し、さらに「内の関係」の主名詞を戻すタスクは難易度が高く、学生も慣れていないため授業後のテストの解答は望まれる内容とはやや乖離している。しかし、この結果から示唆される、学習者が助詞という最も基本的な文法項目を十分に理解していないという事実は、より高度な文法の理解には基本的な文法理解が不可欠であるということが改めて明らかとなった。

本実験はメタ言語意識を活性化することによって連体修飾節の「内の関係」と「外の関係」という言語学の理論的な項目を対象に行った。そしてそこから、言語学の理論的な視点を日本

語学習に応用するとどのような問題やギャップが見えるかという研究目的を背景に行った。その結果として、連体修飾節の「内の関係」と「外の関係」を区別するタスクが「助詞」と「節」というより基本的な学習項目に依存しているという興味深い結果が得られた。

日本語学習において難しい項目を理解するにはその前の項目を理解しないといけないという依存関係があるのは当たり前のことだと考えられる。しかし、このような依存関係はほとんどの教科書では明示されていないので、教師は指導の過程でそれを判断せざるを得ない。本研究の連体修飾節の「内の関係」と「外の関係」を区別するタスクには、「助詞」と「節」という項目が依存することは明らかである。このような観点を授業で導入し、教師が *Focus on Form* の指導法として使用することを通して、学習者の理解の度合いを確認できる。そこから教師が授業を進めるか、もう一度前の授業に戻るか検討できるというメリットがあると考えられる。

まとめと今後の課題

本研究では連体修飾節という言語学の理論的な観点から、「メタ言語」を意識させることが日本語学習にどのように影響を与えるかについて実験を行った。その結果、連体修飾節の理解は「助詞」と「節」というより基本的な学習項目の理解に依存することが分かった。このような依存関係を実際に *Focus on Form* の指導法で導入すると、教師が学習者の理解の度合いを確認することができるというメリットがある。しかし、

本研究の被験者が主に日本語能力試験 N5 のレベルであり、またある特定の大学で行われているものであるため、本研究の結果は適用範囲が狭い。異なる大学の学生、ないし、異なるレベルの学生を対象とすることで別の要因を明らかにできると考えられる。

また、本研究の実験で扱ったインドネシア語の「メタ言語」を意識させる際には、インドネシア語の名詞修飾の体系をより明らかにする必要もある。また、制約の緩い日本語の連体修飾節と比べて、インドネシア語の名詞修飾節は *yang* の有無と受け身文とのかかわりがあり、制約が強い言語でもある。メタ言語意識をさせながら日本語の連体修飾を英語の関係代名詞を通じて教えることも一つの方法だと考えられる。

参考文献

- Achard, M. (2008). Grammatical Instruction in The Natural Approach: A Cognitive Grammar View. In *Cognitive linguistics, second language acquisition, and foreign language teaching* (165-194). De Gruyter Mouton.
- Azarola, E. N. (2013). The Being and Becoming of Metalinguistic Knowledge: Rules and Categories of Grammatical Description as Functional Tools of The Mind. *The metalinguistic dimension in instructed second language learning* (221-242). Retrieved from Bloomsbury Collection.
- Kawatu, Aditio M. D. (2016). *Analisis Kesalahan Penggunaan Klausa Relatif Mahasiswa Program Studi Pendidikan Bahasa Jepang Universitas Negeri Manado* (Unpublished master's thesis). Universitas Pendidikan Indonesia.
- Keenan, E. & Comrie, B. (1977). Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry*, 8(1), 63-99. Retrieved from jstor.org.
- Serrano, R. (2011). From metalinguistic instruction to metalinguistic knowledge, and from metalinguistic knowledge to performance in error correction and oral production tasks. *Language Awareness*, 20(1), 1-16. DOI: [10.1080/09658416.2010.529911](https://doi.org/10.1080/09658416.2010.529911)
- 神澤克徳. (2018). 「連体修飾構文の認知言語学的研究」『京都大学博士論文』.
- 齋藤浩美. (2002). 「連体修飾節の習得に関する研究の動向」『言語文化と日本語教育』5, 45-69.
- 寺村秀夫. (1975). 「連体修飾のシンタクスとその意味—その1—」『日本語・日本文化』4, 大阪外国語大学留学生別科. 71-119.
- 寺村秀夫. (1980). 「名詞修飾部の比較」國廣哲彌編『日英語 比較講座—文法二』大修館書店. 221-260.
- 中島紀子. (2019). 「日本語教科書における 連体修飾節の例文分析」『大正大学研究紀要』104. 133-150
- 日本語教育教材開発委員会. (2005). 『学ぼう！にほんご初級1』東京, 専門教育出版.
- 森内悠佳子. (2016). 「外国語学習者のメタ言語能力についての考察」『フランス語フランス文化研究』(22), 1-9.